

古狻

泉鏡花

青空文庫

「しゃツ、しゃツ、しゃあつ！……」

寄席のいらつしやいのように聞こえるが、これは、いざいざ、いでや、というほどの勢いの掛声と思えば可い。

「しゃあつ！ 八貫—ウン、八貫、八貫、八貫と十ウ、九貫か、九貫と十ウだ、……十貫！—」

目の下およそ八寸ばかり、濡色の鯛を一枚、しるし半纏という処を、めくら縞の筒袖を両方大肌脱ぎ、毛だらけの胸へ、釣身に取って、尾を空に、向顛巻の結びめと一所に、ゆらゆらと匆ねさせながら、掛声でその量を増すように、魚の頭を、下腹から膝頭へ、じりじりと下ろして行くが、

「しゃツ、しゃツ。」

と、腰を切つて、胸を反らすと、再び尾から頭へ、じりじりと響を打たして釣下げる。これ、値を上げる寸法で。

「しゃツ、十貫十ウ、十貫二百、三百、三百ウ。」

親仁の面は朱を灌いで、その吻は蛸のごとく、魚の鰭は萌黄に光った。

「力は入るね、尾を取って頭を下げ下げ、段々に糶せるのは、底力は入るが、見ていて陰気だね。」

と黒い外套がいとうを着た男が、同伴つれの、意気で優容やさがたの円鬘まるまげに、低声こごえで云った。

「そう。でも大鯛だいだいをせるのには、どこでもああするのじやありません？……」

人だちの背後うしろから覗のぞいていたのが、連立れんりつって歩き出して、

「……と言われると、第一、東京の魚河岸の様子もよく知らないで、お恥かしいよ。——

ここで言つては唐突だしぬけで、ちと飛離れているけれど、松江だね、出雲いずもの。……茶町という

旅館はたご間近の市場で見たのは反対だっけ——今の……」

外套の袖を手で掲げて、

「十貫、百と糶せりあ上げるのに、尾を下にして、頭を上へ上へと上げる。……景気もよし、見ているうちに値が出来たが、よう、と云うと、それ、その鯛を目の上へ差上げて、人の頭越ひらりしに翻然と投げる。——処をすかさず受取るんだ、よう、と云つて後うしろの方で。……威勢がいい。それでいて、腰の矢立はこのも同じだが、紺の鯉こいぐち口くちに、仲仕とかのするような広い前掛まを捲まいて、お花見手拭てぬぐいのように新しいのを頸えりに掛けた処ところなどは、お国がら、まことに大どかなものだったよ。」

「陽気ね、それは。……でも、ここは近頃の新聞ですもの。お魚はほんのつきたりで、おにも精進ものの取引をするんですよ。そういつては、十貫十ウの、いまの親仁に叱られるかも知れないけれど、皆が蓮根市場というくらいなんですわ。」

「成程、大きに。——しかもその実、お前さんと……むかしの蓮池を見に、寄道をしたんだっけ。」

と、外套は、洋杖も持たない腕を組んだ。

話の中には——この男が外套を脱ぐ必要もなさそうだから、いけぞんざいだけれども、懇意なく、御免をこうむって、外套氏としておく。ただ旅客でも構わない。

が、私のこの旅客は、実は久しぶりの帰省者であつた。以前にも両三度聞いた——渠の帰省談の中の同伴は、その容色よしの従姉なのであるが、従妹はあいにく京の本山へ参詣の留守で、いま一所なのは、お町というその娘……といつても一度縁着いた出戻りの二十七八。で、親まさりの別嬪が冴返つて冬空に麗かである。それでも、どこかひじめのある身の、縞のおめしも、一層なよやかに、羽織の肩も細りとして、抱込んでやりたいほど、いとらしい風俗である。けれども家業柄——家業は、土地の東の廓で——近頃は酒場か、カフェーの経営だと、話すのに幅が利くが、困つた事にはお茶屋、いわゆる

おん待合だから、ちと申憎い、が、仕方がない。それだけにまた娘の、世馴れて、人見知りをしていない様子は、以下の挙動で追々に知れようと思う。

ちようどいい。帰省者も故郷へ錦ではない。よつて件の古外套で、映画の台本や、仕入ものの大衆向で、どうにか世渡りをしているのであるから。

「陽気も陽気だし、それに、山に包まれているんじゃない、その市場のすぐ見通しが、大きな湖だよ、あの、有名な穴道湖さ。」

「あら、山の中だつて、おじさん、こちらにも、海も、湖も、大きなのがありますわ。」湖は知らず、海に小さなのいつては断じてあるまい。何しろ、話だけでも東京が好きで、珍らしく土地自慢をしない娘も、対手が地方だけに、ちよつと反感を持ったらしい。

いかにも、湖は晃々と見える。が、水が蒼穹に高い処に光っている。近い山も、町の中央の城と向合つた正面とは違い、場末のこの辺は、麓の迫る裾になり、遠山は波濤のごとく累つても、奥は時雨の濃い雲の、次第に霧に薄くなつて、眉は迫つた、すすき尾花の山の端は、巨きな猪の横に寝た態に似た、その猪の鼻と言おう、中空に抽出た、牙の白いのは湖である。丘を隔てて、一条青いのは海である。

その水の光は、足許の地に影を映射して、羽織の栗梅が明るく澄み、袖の飛模様も千

鳥に見える。見ると、やや立離れた——一段高く台を踏んで立った——糶売の親仁は、この小春日の真中に、しかも夕月を肩に掛けた銅像に似ていた。

「あの煙突が邪魔だな。」

ここを入れて行きましよう、同伴が言う、私設の市場の入口で、外套氏は振返って、その猪の鼻の山裾を仰いで言った。

「あれ、温泉よ。」

「温泉？」

「いま通つて来たじやありませんか、おじさん。」

「ああ、あの紺屋の物干場と向い合った……蟋蟀がないていた……」

蟋蟀は……ここでも鳴く。

「その紺屋だつて、あつたのは昔ですわ。垣も何にもなくなつて、いまは草場でしたわね。」

「そうだつけな——実は、あのならびに一人、おなじ小学校の組の友だちが居てね。……八田ながし……」

「そのお飯粒で蛙を釣つて遊んだつて、御執心の、蓮池の邸の方とは違うんですか。」

鯛はまだ値が出来ない。山の端の薄に、顛巻を突合せて、あの親仁はまた反った。

「違うんだよ。……何も更めて名のるほどの事もないんだけど、子供ツて妙なもので、まわりに田があるから、ああ八田だ、それにしても八ツはない。……そんなことを独り合点した事も思出しておかしいし、余り様子が変わっているの、心細いようにもなつて、ついうっかりして——活動写真の小屋が出来た……がらんとしている、不景気だな、とぎよつとして、何、昼間は休みなのだろう、にしておいたよ。そういうえば煙突も真正面で、かえつて、あんなに高く見えなかつたもんだから、明取りかと思つたつけ。……映画の明取りはちと変だね。どうかしている。」

と笑いながら、

「そうかい、温泉かい……こんな処に。」

「沸すんですよ……ただの水を。」

「ただの水はよかつた、成程。」

「でも、温泉といった方が景氣がいいからですわ。そしてね、おじさん、いまの、あれ、猪の湯つていうんですよ。」

「猪の湯?……」

と同伴の顔を見た時は、もうその市場の裡なかを半ば過ぎていた。まだ新しく、ほんの仮設たんすらしい、通抜けで、ただ両側に店が並んだが、二三個処ところうつろに穴があいて、なぜか筆筒ひきだしの抽斗ひきだしの一つ足りないような気がする。今来た入はいりぐち口くちに、下駄屋と駄菓子屋が向合つて、駄菓子屋に、ふかし芋と、茹ゆでた豌豆えんどうを売るのも、下駄屋の前ならびに、子供の履はきものの目立めだちつて紅あかいのも、もの侘わびしい。蒟こん蒻にやくの桶おけに、鮎ふなのバケツが並び、鱈どじょうぎるの筈はずに、天秤を立掛けたままの魚屋の裏羽目からは、あなめあなめ空地の尾花のぞが覗のぞいている……といった形。

——あとで地の理をよく思うと、ここが昔の蓮池の口もとだったのだそうである。——

「皆その御眷属ごけんぞくが売っているようだ。」

「何？ おじさん。」

「いえね、その貉の湯の。」

「あら聞こえると悪ござんすわ。」

とたしなめる目づかいが、つい横の酒類販売店の壇びんに、瞳が蝶のようにちらりと映つて、レットルの桜に白い頬がほんのりする。

「決して悪く云つたのじゃない。……これで地口行燈じぐちあんどんが五つ六つあつてごらん。——横

露地の初^{はつ}午^{うま}じやないか。お祭のようだと祝つたんだよ。」

「そんな事……お祭だなんのといつて、一口飲みたくなつたんじやあ、ありません？ おつかさん（外套氏の従姉をいう）ならですけど、可^い厭^やよ、私、こんな処で、腰掛けて一杯なんぞ。」

「大丈夫。いくら好きだつて、蕃^{とう}椒^{がらし}では飲めないよ。」
と言つた。

市場を出た処の、乾物屋と思う軒に、真^ま紅^{つか}な蕃^{おび}椒^{ただ}が夥^{おび}多^{ただ}しい。……新開ながら老^し舗^{にせ}と見える。わかめ、あらめ、ひじきなど、磯^{いそ}の香^かも芬^{ぶん}とした。が、それが時雨でも誘いそうに、薄暗い店の天井は、輪にかがつて、棒にして、揃えて掛けた、車^{くるま}麩^{ぼう}で一杯であつた。「見事なものだ。村芝居の天井に、雨車を仕掛けた形で、妙に陰気だよ。」

串^{じょうだん}戲^しではない。日向^{ひなた}に颯^{さつ}と村雨^{むらゆ}が掛^かつた、薄^{すすき}の葉^は摺^すれ^ずの音を立てて。——げに北国の冬空や。

二人は、ちよつとその軒下へ入つたが、
「すぐ晴れますわ、狐の嫁入よ。」

という、斜^{ななめ}に見える市場の裏羽目に添つて、紅^べ蓼^{にた}と、露草の枯れがれに咲いて残つた

のが、どちらがその狐火きつねびの小提灯こじょうちんだか、濡々ぬれぬれと灯ともれて、尾花おしなに戦そよいで……それ動いて行く。

「そうか、私はまた狐の糸工場かと思った。雨あしの白いのが、天井の車麩くるまぶから、ずらずらと降ふつて来るようじゃあないか。」

「可いや厭や、おじさん。」

と振よれるばかり、肩を寄せて、

「気味が悪い。」

「じゃあ、言直そう。ここは蓮池のあとらしいし、この糸で曼陀羅まんだらが織れよう。」

「ええ、だって、極楽でも、地獄でも、その糸がいけないの。」

「糸いけなが不可いけないとは。」

「……だって、椎しいの木婆いさんが、糸車を廻す処ところですもの、小豆洗あずきあらともいうんですわ。」

後あと前さきを見廻みまわして、

「それはね、城のお殿様の御寵愛ごちゆうあいの、その姉さんだったと言いましてね。むかし、魔法を使うように、よく祈りのきいた、美しい巫女みこがそこに居て、それが使った貉たぬきだとも言うんですがね。」

あなたは知らないのか、と声さえ憚はばつてお町が言った。——この乾物屋と直角むかいに向合あつて、蓮根れんこんの間屋がある。土間を広々と取り、奥を深く、森しんと暗い、大きな家で、ここを蓮根れんこん市とも呼ぶのは、その故だという。屋の棟を、うしろ下りに、山の中腹と思う位置いちだに、一朵の黒雲の舞下つたようなのが、年数を知らない椎の古木の梢こずえである。大昔から、その根に椎の樹婆ばばしや又またというのが居て、事々に異霊妖ようへん変あを顕あらわす。徒然な時はいつも糸車を廻まわしているのだそうである。もともと私どもの、この旅客は、その小学校友だちの邸とあとを訪とうために来た。……その時分には遊びゆきに往來ゆきもしたろうものを、あの、椎の樹婆ばばを知らないのかと、お町が更に怪しんで言うのであつた。が、八ツや十ウのものを、わざと親たちは威おどしもしまい。……近所に古ふる貉むじなの居る事を、友だちは矜ほこりはしなかつたに違ちがいない。

——町の湯の名もそれから起つた。——そうか、椎の木の犬貉、経ふ立つち貉、化ば婆ば々あ。

「あれえ。」

「……………」

「可い厭や、おじさんは。」

「あやまつた、あやまつた。」

鉄砲で狙われた川蟬のように、日のさす小雨を、綺麗な裾で蓮の根へ飛んで遁げた。お町の後から、外套氏は苦笑いをしながら、その蓮根問屋の土間へ追い続いて、

「決して威す気で言つたんじゃない。——はじめは蛇かと思つて、ぞつとしたつけ。」

椎の樹婆又の話を聞くうちに、ふと見ると、天井の車麩に搦んで、ちよろちよると首と尾が頭われた。その上下に巻いて廻るのを、蛇が伝う、と見るとともに、車麩がくるくると動くように、因果車が軋つて通る。……で悚気としたが、熟と視ると、鼠か、鼠か、降る雨に、あくどく濡れて這っている。……時も時だし、や、小さな貉が天井へ、とうっかり饒舌つて、きれいな鳥を蓮池へ飛ばしたのであつた。

「そんな事に驚く奴があるものか。」

「だつて、……でも、もう大丈夫だわ、ここへ来れば人間の狸が居るから。」

と、大きに蓮葉で、

「権ちゃん——居るの。」

獣ならば目が二つ光るだろう。あれでも人が居るかと思う。透かして見れば帳場があつて、その奥から、大土間の内側を丸太で劃つた——（朝市がそこで立つ）——その劃の外側を廻つて、右の権ちゃん……めくら縞の筒袖を懐手で突張つて、狸より膾膾

に似て、ニタニタと頭あられた。廓くわの美人で顔がきく。この権ちやんが頭あられると、外土間に出張はった縁台に腰を掛けるのに——市が立つと土足で鞣せり上あるのだからと、お町が手巾ハンケチでよく払はいて、縁台に腰を掛けるのだから、じかに七輪しちりんの方がいい、そちこち、お八つ時分、薬罐やくかんの湯も沸はいていようと、遥はるかな台所口からその権ちやんに持つて来させて、御挨拶は沢山……大きな坊やは、こう見えても人見知りをするから、とくるりと権ちやんに背う後しろを向かせて、手で叩く真似をすると、えへへ、と権ちやんの引込ひっこんだ工合ぐあいが、印いんは結むすばないが、姉さんの妖術ようじゆつに魅かつたようであつた。

通り雨は一通り霽あつたが、土は濡ぬれて、冷ひやくて、翡翠かわせみの影が駒下駄すべを込こめてまた映うつる……片褸かたつま端折はしよりに、乾物屋の軒を伝つつて、紅端緒べにはなの草履わらじではないが、ついと楽屋口がまへ行く状さまに、肩細く市場へ入いつたのが、やがて、片手にビールの壺びん、と見ると片手に持もつた硝子盃コップが、光りを分けて、二つになつて並んだのは、お町さんも、一口つき合あつてくれる気か。

「しやツ、しやツ。」

思おもわず鞣せり声こゑを立てて、おじさんは、手を揚げながら、片手で外套の膝ひざを叩たたいた。

「お手柄、お手柄。」

土間はたちまち春になり、花の蕾つぼみの一輪を、朧おぼろよ夜にすかさずごとく、お町の唇をビイルで撓ためて、飲むほどに、蓮池のむかしを訪とう身には本懐とも言えるであろう。根を掘上げたばかりと思う、見事な蓮根が柵さくの内うち外そと、浄土の逆茂木さかもぎ。勿体ないが、五百羅漢ごひやくらかんの御お腕うでを、組違えて揃う中に、大筰おおざるに慈姑くわいが二杯。泥のままのと、一筰は、藍あい浅く、颯さつと青に洗上げたのを、ころころと三つばかり、お町が取つて、七輪へ載せ、尉じょうを払い、火箸であしらい、媚なまめかしい端折はしよりのまま、懐ふところ紙がみで煽あおぐのに、手巾ハンケチで軽く髪つやの艶かばを庇かばったので、ほんのりと珊瑚さんごの透くのが、三杯目の硝子盃さんごに透いて、あの、唇くちびるだか、その珊瑚さんごだか、花だか、蕾つぼみだか、蕩然とうぜんとなる。

「町子嬢、町子嬢。」

「は。」

と頸えりの白さを、滑なめらかに、長く、傾かたいてちよつと嬌態しなを行やる。

「気取つたな。」

「はあ。」

「一体いったいこりやどういふ事になるんだい。」

「慈姑くわいの田楽、ほほほ。」

と、簪かんざしの珊瑚と、唇が、霞の中に、慈姑とは別に二つ動いて、

「おじさんは、小児こどもの時、お寺へ小僧さんにやられる処だつたんだって……何も悪たれ坊ツてわけじゃない、賢くつて、おとなしかつたから。——そうすりやきつと名僧知識になれたんだ。——お母つかさんがそういつて話すんだわ。」

「悪かつたよ。その方がよかつたんだよ。相済まなかつたよ。」
今度は、がばがばと手酌で注ぐ。

「ほほほほ、そのせいだか、精進男で、慈姑の焼いたのが大好きで、よく内へ来て頼張つたんだって……お母さんたら。」

「ああ、情なさけない。慈姑とは何事です。おなじ発心をしたにしても、これが鱒どじょうだと引導を渡す処だが、これじゃ、お念仏を唱えるばかりだ。——ああ、お町ちゃん。」

わざとした歎息を、陽気に、ふツと吹いて、

「……そういえば、一昨日おとといの晩……途中で泊つた、鹿落かおちの温泉でね。」

「ええ。」

「実際、お念仏を唱えたよ、真夜半まよなかさ。」

「夜半。」
よなか

と七輪の上で、火の氣に賑かな頬が肅然と沈んだ。

「……何、考えて見れば、くだらない事なんだが、鹿落は寂しい処だよ。そこを狙ったわけでもないが、来がけに一晩保養をしたがね。真北の海に向つて山の中腹にあるんだから、長い板廊下を九十九折とつた形に通るんだ。——知っているかも知れないが。——座敷は三階だつたけれど、下からは四階ぐらいに当るだろう。晩飯の烏賊と蝦は結構だつたし、赤蜻蛉あかとんぼに海の夕霧で、景色もよかつたが、もう時節で、しんしんと夜の寒さが身に沁みる。あすこいら一带に、袖のない夜具だから、四布の綿の厚いのがごつごつ重くつて、肩がぞくぞくする。枕まくらもと許あつかんへ熱爛を貰つて、硝子盃酒コツプざけいきおいの勢で、それでもぐつすり疲れて寝た。さあ何時頃だつたらう。何しろ真夜半だ。廁かわやへ行くのに、裏階うらぼしこ子を下りると、これが、頑丈な事は、巨巖おおいわを研開きりひらいたようです。下りると、片側に座敷が五つばかり並んで、向うの端だけ客が泊つたらしい。ところが、次の間つきで、奥だけ幽かすかにもれていて、あとが暗い。一方が洗面所で、傍そばに大きな石の手水鉢ちようずばちがある、跣かかんで手を洗うように出ていて、笕かけひで谿河たにがわの水を引くらしい……しよろ、しよろ、ちやぶりと、これはね、座敷で枕にまで響いたんだが、風の声も聞こえない。」

「まあ……」

「すぐの、だだツ広い、黒い板の間の向うが便所なんだが、その洗面所に一つ電燈でんきが点ついているきりだから、いとどさえ夜ふけの山氣おに圧おされて、薄暗おかっただけだと思っておくれ。」

「可厭いやあね。」

「止むを得ないよ。……實際なんだから。晩に見た心覚えでは、この間に、板戸があつて、一枚開いていたように思つたんだが、それが影もなかつた。思いちがいなんだろう。」

山霧もやの冷いのが——すぐ外は崖の森だし——窓から、隙間から、立て籠こむと見えて、薄い靄もやのようなものが、敷居ふきいに立つて、それに木目がありそうに見える。ところで、穿はいた草履ぞうりが、笹葉ささつばでも踏む心こころ持もちにバサリとする。……暗い中に、三つ並んでいるんです。

「あの、鹿落。」

と、瞳を凝らした、お町の眉に、その霧が仄ほのかにうつつた。

「三階の裏階子を下りた処ところだわね、三つ並んだ。」

「どうかしたかい。」

「どうして……それから。」

お町は聞返して、また息を引いた。

「その真中の戸が、ボタン……と。」

「あら……」

「いいえさ、怯かすんじゃない。そこで、いきなり開いたんだと、余計驚いたろうが——開いていたんだよ。ただし、開いていた、その黒い戸の、裏棧に、白いものが一条、うねうねと伝っている。」

「……………」

「どこからか、細目に灯が透くのかしら？……その端の、ふわりと薄匾ったい処へ、指が立って、白く匆ねて、動いたと思うと、すつと扉が閉った。招いたような形だが、串戯じゃあない、人が行ったので閉めたのさ。あとで思ってもまったく色が白かった、うつくしい女の手だよ——あ、どうした。」

その唇が、眉とともに歪んだと思うと、はらりと薰って、胸に冷り、円鬚の手巾の落ちかかると、一重だけは隔てたが、お町の両の手が、咄嗟に外套の袖をしごくばかりに引拵んで、肩と袖で取継った。片棲の襦袢が散って、山茶花のようにこぼれた。

この身動きに、七輪の慈姑が転げて、コンと向うへ飛んだ。一個は、こげ目が紫立って、

蛙ひとだまの人魂ひとたまのように暗い土間に尾さえ曳ひく。

しばらくすると、息つぎの麦酒ビールに、色を直して、お町が蛙の人魂の方を自分で食べ、至極尋常なのは、皮を剥はがして、おじさんに振舞ったくらいであるから。——次の話が、私はじめ、読者諸君も安心して聞くことを得るのである。

一体、外套氏が、この際、いまの鹿落の白い手を言出したのは、決して怪談がかりに娘を怯おどかすつもりのもではなかった。近間ではあるし、ここを出たら、それこそ、ちちろ鳴く虫が糸を繰ねる音ねに紛まれる、その椎しい樹のき——（釣瓶つるべおろし）（小豆あずきとぎ）などという怪ばけものは伝統的につきもの——樹の下を通って見たかった。車麩くるまぶの鼠ねずみに怯おびえた様子では、同行を否定されそうな形勢だった処から、「お町さん、念仏を唱えるばかり吃びっくり驚おどろした、厠かわやの戸の白い手も、先へ入っていた女が、人影に急いで扉とを閉めただけの事で、何でもないので。」と、おくれ馳ばせながら、正体見たり枯尾花流に——続いて説明に及ぶと、澄はんだ真顔まななになつて、鹿落の旅館の、その三つ並んだ真中の厠まんなかは、取壊して今はない筈はずだ、と言つて、先手に、もう知つている。……

はてな、そういえば、朝また、ようをたした時は、ここへ白い手が、と思う真中のは、

「おどかしなさんない。おじさんを。」と外套氏は笑ったが。

——今年余寒の頃、雪の中を、里見、志賀の両氏が旅して、新潟の鍋茶屋などと併び称せらるる、この土地、第一流の割烹で一酌し、場所をかえて、美人に接した。その美人たちが、河上の、うぐい亭へお立寄り遊ばしたか、と聞いて、その方が、なお、お土産になりますのに、と言ったそうである。うぐい亭の存在を云爾ために、両家の名を煩わしたに過ぎない。両家はこの篇には、勿論、外套氏と寸毫のかかわりもない。続いて、仙女香、江戸の水のひそみに倣って、私が広告を頼まれたのでない事も断っておきたい。

近頃は風説に立つほど繁昌らしい。この外套氏が、故郷に育つ幼い時分には、一度ほとんど人気の絶えるほど寂れていた。町の場合から、橋を一つ渡って、山の麓を、五町ばかり川添に、途中、家のない処を行くので、雪にはいうまでもなく埋もれる。平家づくりで、数奇な亭構えで、笈の流れ、吹上げの清水、藤棚などを景色に、四つ五つ構えてあつて、通いは庭下駄で、おも屋から、その方は、山の根に。座敷は川に向つているが、すぐ磧で、水は向う岸を、藍に、蒼に流れるのが、もの静かで、一層床しい。籬ほどもな低い石垣を根に、一株、大きな柳があつて、幹を斜に磧へ伸びつつ、枝は八方へ、座敷

の、どの窓も、廂も、蔽うばかり見事に靡いている。月には翡翠の滝の糸、雪には玉の簾を聯ねよう。

それと、戸前が松原で、抽でた古木もないが、ほどよく、暗くなく、あからさまならず、しつとりと、松葉を敷いて、松毬まじりに掻き分けた路も、根を畝つて、奥が深い。いつも松露の香がたつようで、実際、初茸、しめじ茸は、この落葉に生えるのである。入口に萩の枝折戸、屋根なしに網代の扉がついている。また松の樹を五株、六株。すぐに石ころ道が白く続いて、飛地のような町屋の石を置いた板屋根が、山裾に沈んで見えると、そこにその橋がある。

蝙蝠に浮かれたり、螢を追ったり、その昔子供等は、橋まで来るが、夜は、うぐい亭の川岸は通り得なかつた。外套氏のいう処では、道の途中ぐらい、麓の出張つた低い積の岸に、むしろがこいの掘立小屋が三つばかり築の崩れたようなのがあって、古俳句の——短夜や（何とかして）川手水——がそっくり想出された。そこが、野三昧の跡とも、山窩が甘い水を慕つて出て来るともいう。人の灰やら、犬の骨やら、いずれ不気味なその部落を隔てた処に、幽にその松原が黒く乱れて梟が鳴いているお茶屋だった。——鮠の類は格別、亭で名物にする一尺の岩魚は、娘だか、妻女だか、艶色に懸相して、

獺が件の柳の根に、鱈ある錦木にするのだと風説した。いささか、あやかしがついでいて、一層寂れた。鵜の啣えた鮎は、殺生ながら賞翫しても、獺の抱えた岩魚は、色恋といえども気味が悪かつたものらしい。

今は、自動車さえ往来をするようになって、松蔭の枝折戸まで、つきの女中が、柳なんぞの縞お召、人懐く送つて出て、しとやかな、情のある見送りをする。ちようど、容子のいい中年増が給仕に当つて、確に外套氏がこれは体験した処である。ついでに岩魚の事を言おう。瀬波に翻える状に、背尾を刎ねた、皿に余る尺ばかりな塩焼は、まったく美味である。そこで、讚歎すると、上流、五里七里の山奥から活のまま徒歩で運んで来る、山爺の一人なぞは、七十を越した、もう五十年余りの馴染だ、と女中が言った。してみると、おなじ獺でも山獺が持参するので、伝説は嘘でない。しかし、お町の——一説では、上流五里七里の山奥から山爺は、——どの客にも言うのだそうである。

水と、柳のせいだろう。女中は皆美しく見えた。もし、妻女、娘などがあつたら、さぞ妍艶であろうと察しらるる。

さて、「いらして、また、おいで遊ばして」と枝折戸でいう一種綿々たる余韻の松風に伝う挨拶は、不思議に嫋々として、客は青柳に引戻さるる思がする。なお一段と余情

のあるのは、日が暮れると、竹の柄の小提灯で、松の中の径を送出すのだそうである。小
 棲の色が露に^{すべ}に^{つま}って、こぼれ松葉へ映るのは、どんなにか媚かしかろうと思う。

「——お藻代さんの時が、やっぱりそうだったんですってき。それに、もう十時すぎだつ
 たというんです。」

五年前、六月六日の夜であつた。明直に言えば、それが、うぐい亭のお藻代が、白い手
 の幻影になる首途であつた。

その夜、松の中を小提灯で送り出た、中京、名古屋の一客——畜生め色男——は、枝折
 戸口で別れるのに、恋々としてお藻代を強いて、東の新地——廓の待合、明保野という、
 すなわちお町の家まで送って来させた。お藻代は、はじめから、お町の内に馴染ではあつ
 たが、それが改めて深い因縁になつたのである。

「あの提灯が寂しいんですわ……考えてみますと……雑で、白張のようなんですもの。」

「うぐい。」——と一面——「亭」が、まわしがきの裏にある。ところが、振向け方で、「うぐい」だけ黒く浮いて出ると、お経ではない、あの何とか、梵字ぼんじとかのようで、卵塔場の新墓ともに灯れていそうに見えるから、だと解く。——この、お町の形象学は、どうも三世相んせそうの鼈頭べいとうにありそうで、承服しにくい。

それを、しかも松の枝に引掛ひっかけて、——名古屋の客が待っていた。冥途めいどの首途かどでを導くようじゃありませんか、五月さつきやみ闇に、その白提灯を、ぼつと松林の中に、という。……成程、もの寂しさは、もの寂しい……

話はちよつと前後した——うぐい亭では、座つきに月雪花。また少々よくば慾張つて、米俵だの、丁字ちようじだの、そうした形の落雁らくがんを出す。一枚ひとつずつ、女の名が書いてある。場所として最も近い東の廊くわわのおもだった芸妓連げいしやが引札ひきふだがわりに寄進につくのだそう。勿論、かけ離れてはいるが、呼べば、どの妓おんなも三味線さみせんに応ずると言う。その五年前、六月六日の夜——名古屋の客は——註しておくが、その晩以来、顔馴染にもなり、音信おとすれもするけれども、その姓名だけは……とお町が堅く言わないのだそうであるから、ただ名古屋の客として。……あとを続けよう。

「——みんな、いい女らしいね。見た処。中でも、俵のなぞは嬉しいよ。ここに雪形に、もよ、というのは。」

「飛んだ、おそまつでございませす。」

と白い手と一所に、銚子ちようしがしなうように見えて、水色の手絡てがらの円鬘まるまげが重そうに俯向うつむいた。——嫋かな女だというから、その容子ようすは想像に難くない。欄干らんかんに青柳しだの枝垂しだる裡なかに、例の一尺の岩魚いわな。と蓴菜じゆんさいの酢味噌くくるみ。胡桃くるみと、飴煮あめにの鮎あじの鉢ぼち、鮎あじとせん牛蒡ごぼうの椀めさき。……

「これだけは、密そつと取りのけて、お客様には、お目に掛けませんのに、どうして交つていたのでございませすね。」——

「いや、どうもその時の容子ようすといつたら。」——

名古屋の客は、あとで、廓の明保野で——落雁で馴染の芸妓を二三人一座に——そう云つて、燥はしぎもしたのだそうで。

落雁を寄進の芸妓連が、……女中頭ではあるし、披露ひろめのためなんだから、美しく婀娜あだなお藻代の名だけは、なか間の先頭にかき込んでおくのであつた。

——断るまでもないが、昨日きのうの外套きものう氏の時の落雁には、もはやお藻代の名だけはなかつた。——

さて、至極古風な、字のよく読めない勘定がきの受取が済んで、そのうぐい提灯で送つて出ると、折戸を前にして、名古屋の客が動かなくなつた。落雁の芸妓を呼びに廊へ行く。是非送れ、お藻代さん。……一見は利かずとも、電話で言込めば、と云つても、威勢よく酒の機嫌で承知をしない。そうして、袖たけの松の樹のように動かない。そんな事で、誘われるような婦おんなではなかつたのに、どういう縁か、それでは、おかみさんに聞いて許しを得て。……で、おも屋に引返したあとを、お町がいう処の、墓はかしよ所の白張あおむのような提灯を枝にかけて、しばらく待つた。その薄い灯あかりで、今度は、蕈きのこが化けた状さまで、帽子を仰向けあおむに据しゃがんでいて待つ。

やがて、出て来た時、お藻代は薄化粧をして、長襦袢ながじゆばんを着換えていた。

その長襦袢で……明保野で寝たのであるが、朱鷺色ときいろの薄いのに雪輪を白く抜いた友染である。径みちに、ちらちらと、この友染が、小提灯で、川風が水に添い、野茨のぼら、卯うの花。且つちり乱るる、山裾の草にほのめいた時は、向瀬むこうせの流れも、低い磧かわらの撫子なでしこを越して、駒下駄に寄つたらう。……

風が、どつと吹いて、蓮根市の土間はひさしきが下りに五月闇のように暗くなった。一雨来よう。組合わせた五百羅漢の腕が動いて、二人を抱かかえ込みそうである。

どうも話が及および腰こしになる。二人でその形に、並んで立つてもらいたい。その形、……その姿で。……お町さんとかも、褻端折をおろさずに。——お藻代も、道芝の露に裳もすそを引揚げたというのであるから。

一体黒い外套氏が、いい年をした癖に、悪く色気があって、今しがた明保野の娘が、お藻代の白い手に怯おびえて取縋った時は、内々で、一抱やわらき柔かな胸を抱だきこ込んだろう。……ばかりでない。はじめ、連立つて、ここへ庭樹の多い士族町を通る間に——その昔、江戸護持院ヶ原の野のぼとけ仏ぼつだった地藏様が、負おぶわれて行こう……とおぼろ夜よにニコリと笑つて申されたを、通りがかった当藩三百石、究くつきよう竟の勇士が、そのまま中仙道北陸道を負おぶい通いて帰国した、と言伝えて、その負おぶさしたもうた腹部の中なか窪くぼみな、御丈みたけ、丈余じょうよの地藏尊を、ふるやしき古ふる邸やしきの門内に安置して、花筒に花、手水鉢に柄ひしやく杓やくを備えたのを、お町が手つぎに案内すると、外套氏が懐しそうに拝んだのを、嬉しがって、感心して、こん度は切殺された、城のお妾めかけさん——のその姿で、縁切り神さんが、向うの森の祠ほこらにあるから一所に行こうと、

興に乗じた時……何といった、外套氏。——「縁切り神様は、いやだよ、二人して。」は、苦々しい。

だから、ちよつとこの子をこう借りた工合くあいに、ここで道行きの道具がわりに使われても、憾うらみはあるまい。

そこで川通りを、次第に——そうそう肩を合わせて歩行あいたとして——橋は渡らずに屋敷町の土塀を三曲りばかり。お山の妙見堂の下を、たちまち明るい廓へ入つて、しかも小提灯のまま、客の好みの酔興な、燈籠とうろうの絵のように、明保野の入口へ——そこで、うぐいの灯が消えた。

「——藤紫の半襟が少しはだけて、裏を見せて、織り肌襦袢ほつその真紅なのが、縁の糸とかの、燃えるように、ちらちらして、静しずかまぶたに瞼まぶたを合わせていた、お藻代さんの肌の白いこと。……六畳は立籠たてこめてあるし、南風みなみけ気で、その上暖か過ぎたでしょう。鬢びんの毛がねつとりと、あの気味の悪いほど、枕に伸びた、長い、ふっくりしたのどへまつわつて、それでいて、色が薄うつつりと蒼あおいんですつて。……友染の夜具に、裾は消えるように細ほつそりしても——寝乱れよ、

おじさん、家業で芸妓衆げいしやしゆのなんか馴なれていても、女中だつて堅い素人なんでしょう。名古屋の客に呼ばれて……お信のぶ——ええ、さつき私たち出しなに駒下駄を揃えた、あの銀いちよ杏うがえし返かへの、内のあの女中ですわ——二階廊下を通りがかりにね、（おい、ねえさんか、湯を一杯。）……

（お水を取かえて参りましょうか。） 枕まくらもと頭とにあるんですから。（いや、熱い湯だ。……時々こんな事がある。飲過ぎたと見えて寒気がする。）……これが襖越ふすましのやりとりよ。……

私？……私は毎朝のように、お山の妙見様へお参りに。おつかさんは、まだ寢床に居たんです。台所の薬罐ゆわかしにぐらぐら沸たぎつたのを、銀の湯沸ゆわかしに移して、塗盆で持つて上つて、（御免遊ばせ。）中庭の青葉が、緑の霞に光つて、さし込む裡なかに、いまの、その姿でしよう。——馴なれない人だから、帯も、扱しりき帯も、羽衣むしでも、つたように、ひき乱れて、それも男の手で脱ぬがされたのが分ります。——薄い朱鷺色とぎいろ、雪輪なんですもの、どこが乳ちだか、長襦袢ちほりだか。——六畳だし……お藻代さんの顔の前、枕まではゆきにくい。お信が、ぼうとなつて、入口に立ちますとね、（そこへ。）と名古屋の客がおっしゃる。……それなりに敷蒲団しきぶとんの裾へ置いて来たそうですわ。」

外套氏は肩をすくめた。思わず危険を予感した。

「名古屋の客が起上りしな、手を伸ばして、盆ごと取って、枕頭へ宙を引くトタンに塗盆をこつたんです。まるで、黒雲の中から白い猪が火を噴いて飛菟る勢で、お藻代さんの恍惚したその寝顔へ、蓋も飛んで、仰向けに、熱湯が、血ですか、蒼い鬼火でしょうか、玉をやけば紫でしょうか……ばつと煮えた湯気が立ったでしょう。……お藻代さんは、地獄の釜で煮られたんです。

あの、美しい、鼻も口も、それツきり、人には見せず……私たちも見られません。」

「野郎はどうした。」

と外套氏の膝の拳が上った。

「それはね、ですが、納得ずくです。すっかり身支度をして、客は二階から下りて来て——長火鉢の前へ起きて出た、うちの母の前へ、きちんと膝に手をつけて、

（——ちよつと事件が起りました。女は承知です。すぐ帰りますから。）——

分外なお金子に添えて、立派な名刺を——これは極秘に、と云ってお出しなすつたそうですが、すぐに式台へ出なさいますから、（ちよつとどうぞ、旦那。）と引留めて置いて、まだ顔も洗わなかったそうですけれど、トントンと、二階へ上って、大急ぎで廊下を廻つ

て、襖ふすまの外から、

（——夫人おくさん——）

ひっそりしていたそうです。

（——夫人さん、旦那様はお帰りになりますか。——）

ものに包まれたような、ふくみ声で、

（いらして、またおいであそばして……）——

と、震えて、きれぎれに聞こえたつて言います。

おじさん、妙見様から、私が帰りました時はね、もう病院へ、母がついて、自動車で行ったあとです。お信たちのいうのでは、玉子色の絹の手ハンケチ巾で顔を隠した、その手巾が、もう附着くっついていて離れないんですつて。……帯をしめるのにも。そうして手巾に（もよ）と紅糸あかいとで端縫はしぬいをしたのが、苦痛にゆがめて嚙かみ緊める唇が映って透くようで、涙は雪が溶けるように、頸えりあし脚へまで落ちたと言います。「

「不可いけない……」

外套氏は、お町の顔に当てた手巾あわただを慌しく手で払った。

雨が激しく降って来た。

「……何とも申様がない……しかし、そこで鹿落の温泉へは、療治に行ったとでもいうわけかね。」

「湯治だなんのつて、そんな怪我ではないのです。療治は疾とうに済んだんですが、何しろ大変な火傷やけどでしょう。ズツと親もとへ引込んでいたんですが、片親です、おふくろばかり——外へも出ません。私たちが行つて逢う時も、目だけは無事だったそうですけれども、すみの目金をかけて、姉ねえさんかぶりをして、口にはマスクを掛けて、御経を習っていました。お客から、つけ届けはちゃんがありますが、一度来るといつて、一年たち三年たち、……もつとも、沸湯にえゆを浴びた、その時、（——男を一人助けて下さい。……見継ぎは、一生する。）——両手をついて、言つたんですつて。

お藻代さんは、ただ一夜ひとよの情なさけで、死んだつもりで、地獄の釜うなずで領うなずいたんですね。ですから、客の方で約束は違えないんですが、一生飼殺し、といった様子でしょう。

旅行たびはどうしてしたでしょう。鹿落の方角です、察しられますわ。霜月でした——夜汽車はすいていますし、突伏つつぶしてでもいれば、誰にも顔は見られませんの。

温泉宿でも、夜汽車について、すぐ、その夜半よなかだったんですつて。——どこでもいうことでしょうかしら？ 三つ並んだはばかりの真中まんなかへは入るものではないとは知っていた

けれども、誰も入るもののないのを、かえって、たよりにして、夜ふけだし、そこへ入って……情ないわけねえ。……鬱陶しい目金も、マスクも、やっと取って、はばかりの中ですよ。——それで吻として、大な階子段の暗いのも、巖山を視めるように珍らしく、手水鉢に筧のかかった景色なぞ……」

「ああ、そうか。」

「うぐい亭の庭も一所に、川も、山も、何年ぶりか、久しぶりで見る気がして、湯ざめで冷くなるまで、覗いたり、見廻したり、可哀想じやありませんか。」

——かきおきにあつたんです——

ハツと手をのぼして、戸を内へ閉めました。不意に人が来たんですね。——それが細い白い手よ。」

「むむ、私のような奴だ。」

と寂しく笑いつつ、毛肌になつて悚とした。

「ぎゃつと云つて、その男が、凄じい音で顛動返ってしまったんですってね。……夜番は駆けつけますわ、人は騒ぐ。気の毒さも、面目なさも通越して、ひけめのあるのは大火傷の顔のお化でしょう。」

もう身も世も断念めて、すぐに死場所の、……鉄道線路へ……」

「廁かわやからすぐだろうか。」

「さあね、それがね、恥かしさと死ぬ気の、一念で、突き破ったんでしようか。細い身体からだなら抜けられるくらい古壁は落ちていたそうですけれど、手も浄きよめずに出たなんぞって、そんなのは、お藻代さんの身に取って私は可厭いや。……それだどこで遺書かきおきが出来ます。」

——轢ひかれたのは、やっと夜の白みかかった時だつていうんですもの。もっとも（幽かすかな月様の影をたよりに）そうかいてもあるんですけれども。一旦座敷へ帰ったんです。一生懸命、一大事、何かの時、魂も心も消えるといえ、姿だつて、消えますわ。——三枚目の大男の目をまわしているまわりへ集まった連中の前は、霧のように、スツと通つて、悠然と笥で手水をしたでしょう。」

「もの凄すごい。」

「でも、分らないのは、——新聞にも出ましたけれど、ちゃんと裾腰すそこしのたしなみはしてあるのに、衣きものは、肌まで通つて、ぐっしより、ずぶ濡れだつたんですって。……水ごりでも取りましたか、それとも途中の小川へでも落ちたんでしようか。」

「ああ、縁台が濡れる。」

と、お町の手を取って、位置を直して、慎重に言った。

「それにね、首……顔がないんです。あの、冷いほど、真ま白しろな、乳も、腰も、手足も残して。……微塵みじんに轢ひかれたんでしょう。血の池で、白魚わかしほが湧わいたように、お藻代さんの、顔だの、頬だのが。

堤防どてを離れた、電信のはりがねの上の、あの辺……崖しの中途の椎しいの枝に、飛上った黒髪が——根をくるくると巻いて、倒さかに真黒まつくろな小蓑こみのを掛けたようになって、それでも、優しい人ですから、すんなりと朝露に濡れていました。それでいて毛筋をつたわって、落ちる雫しずくが下へ溜たまって、血だつたそうです。」

「寒くなつた。……出ようじゃないか。——ああ西日が当たると思つたら、向うの蕃とうがらし椒しか。慌あわてている。が雨は霽あがつた。」

提灯なしに——二人は、歩あ行るき出した。お町の顔の利くことは、いつの間にか、蓮根の中へ寄掛けて、傘が二本立掛けてあるのを振返つて見たので知れる。

「……あすこに人が一人立っているね、縁台を少し離れて、手摺てすりに寄掛よしかかつて。」

「ええ、どしゃ降りの時、気がつきましたわ。私、おじさんの影法師かと思つたわ。——まだ麦酒ビールがあつたでしょう。あとで一口めしあがるなぞは、洒落しやれてるわね。」

「何だ、いま泣いた鳥がもう出て笑う、というのは、もうちと殊勝な、お人柄の事なんだぜ。私はまた、なぜだか、前刻さつきいった——八田——紺屋の干場の近くに家のあつた、その男のような気がしたよ。小学校以来。それだつて空くうな事過ぎるが、むかし懐かしさに、ここいら歩行あるかないとは限らない。——女づれだから、ちよつと言ことばを掛けかねたろう。……

それだと、あすこで一杯やりかねない男だが、もうちと入組んだ事がある。——鹿落を日暮方出て此地ここへ来る夜汽車の中で、目の光る、陰気な若い人が真ま向まうに居てね。私と向い合つと、立掛けてあつた鉄砲——あれは何とかいふ猟銃しんちさ——それを縦に取つて、真しんち鍬ゆうの蓋ふたを、コツコツ開けたり、はめたりする。長い髪の毛を一振りながら、（猟師と見えますか。）ニヤリと笑つて、（フフン、世を忍ぶ——仮装ですよ。）と云つてね。袋から、血だらけな頬ほお白しろを、（受取つてくれたまえ。）——そういつて、今度は銃を横へ向けて撃うち鉄がねをガチンと掛けるんだ。（鹿葉そはだが、いかがです。）——貰いものじゃあるが葉巻を出すと、目を見据えて、（贅ぜいたく沢たくなものをやりますな、僕は、主義として、そういうものは用いやないです。）またそういつて、撃鉄をカチツと行やる。

貰いものの葉巻を吹かすより、霰さん弾だんで鳥をばらす方が、よっぽど贅沢ぜいたくじゃないか、と思つたけれど、何しろ、木胴鉄胴きどうてつどうからくり胴鳴つて通る飛団子、と一所に、隧トン道ネルを幾

つも抜けるんだからね。要するに仲蔵以前の定九郎だろう。

そこで、小鳥の回向料えこうりょうを包んだのさ。

十時四十分頃、二つさきの山の中の停車場へ下りた。が、別れしなに、袂たもとから名札を出して、寄越よこそうとして、また目を光らして引込ひっこめてしまった。

——小鳥は比羅びらのようなものに包んでくれた。比羅は裂いて汽車の窓から——小鳥は——包み直して宿へ着いてから裏の川へ流した。が、眼張魚めばるは、臺ひきがえることわざだと諺に言うから、血の

頬白うぐいは、になろうよ。——その男のだね、名刺に、用のありそうな人物が、何となく、立っていたんじゃないかとも思つたよ。」

家業わかりがら了解は早い。

「その向むきの方なら、大概私が顔見知りよ。……いいえ、盗賊どろぼうや風俗の方ばかりじゃありません。」

「いや、大きに——それじゃ違つたろう。……安心した。——時に……実は椎の樹を通つてもらおうと思つたが、お藻代さんの話のいまだ。今度にしようか。」

「ええ、どちらでも。……ですが、もうこの軒を一つ廻つた塀外が、じきその椎の樹ですよ。棟に蔭がさすでしょう。路地の暗いのもそのせいですわ。」

「大きな店らしいのに、寂寞ひっそりしている。何屋だろう。」

「有名な、湯葉屋です。」

「湯葉屋——坊主になり損そこなった奴の、慈姑くわいと一所に、大好きなものだよ。豆腐の湯へ箱形の波を打って、皮が伸びて浮く処をすくい上げる。よく、東の市場で覗のぞいたつけ。……あれは、面白い。」

「入ってみましょう。」

「障子は開いている——ははあ、大きな湯の字か。こん度は映画と間違えなかった。しかし、誰も居ないが、……可いいかい。」

「何かいったら、挨拶をしますわ。ちよつと参観に、何といたしましたよ、——見学に、ほほ。」

掃清めた広い土間に、惜おしいかな、火の気がなくて、ただ冷たい室むろだった。妙に、日の静し寂間じまだったと見えて、人の影もない。窓の並んだ形が、椅子をかたづけけた学校に似ていたが、一列に続いて、ざつと十台、曲かねじやく尺に隅を取って、また五つばかり銅あかがねの角鍋が並んで、中に液体だけは湛たたえたのに、青桐あおぎりの葉が枯れつつ映っていた。月も十五に影を宿すであろう。出ようとすると、向うの端から、ちらちらと点ついて、次第に竈かまどに火が廻った。

電気か、瓦斯がすを使うのか、ほとんど五彩である。ぱつと燃えはじめた。

この火が、一度に廻ると、カアテンを下ろしたように、窓が黒くなって、おかしな事は、立っている土間にひだを打って、皺しわが出来て、濡色つやに光沢つやが出た。

お町が、しつかりと手を取った。
背後うしろから、

「失礼ですが、貴方あなた……」

前刻さつきの蓮根市はすいぢの影法師が、旅装で、白哲はくせきの紳士になり、且つ指環ゆびわを、竈かまどの火に彩られて頭あちわれた。

「おお、これは。」

名古屋に時めく大資産家の婿君で、某学校の教授と、人の知る……すなわち、以前、この蓮池邸はすいけやしきの坊ちゃんであった。

「見覚えがおありでしょう。」

と斜ななめに向つて、お町にいった。

「まあ。」

時めく婿は、帽子ソフトを手にして、

「後刻、お伺いする処でした。」

驚破す、再び、うぐい亭の当夜の嫖客は——渠であつた。

三人のめぐりあい。しかし結末にはならない。おなじ廓へ、第一歩、三人のつまさきが六つ入交つた時である。

落葉のそよぐほどの、登音もなしに、曲尺の角を、この工場から住居へ続くらしい、細長い、暗い土間から、白髪がすすくすくと生えた、八十を越えよう、目口も褐漆に干からびた、脊の低い、小さな媼さんが、継はぎの厚い布子で、腰を屈めて出て来た。

蒼白になつて、お町があとへ引いた。

「お姥さん、見物をしていますよ。」

と鷹揚に、先代の邸主は落ついて言った。

何と、媼は頷をしゃくつて、指二つで、目を弾いて、じろりと見上げたではないか。

「無断で、いけませんでしたかね。」

外套氏は、やや妖変を感じながら、丁寧に云つたのである。

「どうなとせ。」

唾と泡が囁合うように、ぶつぶつと一言いったが、ふ、ふふん、と鼻の音をさせて、

膝の下へ組手のまま、腰を振って、さあ、たしか鍋なべの列のちようど土間へ曲角の、火の気の赫かつと強い、その鍋の前へ立つと、しゃんと伸びて、肱ひじを張り、湯気のむらむらと立つ中へ、いきなり、くしゃくしゃの顔を突つ込んだ。

が、ばつと音を立てて引抜いた灰汁あくの面つらと、べとりと真黄色まつきいろに附くつた、豆腐の皮と、どつちの皺しわぞ！　這はつたように、低く踞しゃがんで、その湯葉の、長い顔を、目鼻もなしに、ぬつと擡もたげた。

口のあたりが、びくりと動き、苔こけの青い舌を長く吐いて、見よ見よ、べろべろと舐なめ下ろすと、湯葉は、ずり下りさが、めくれ下りお、黒い目金と、耳までのマスクで、口が開いた、その白い顔は、湯葉一枚を二倍にして、土間の真まん中なかに大きい。

同時に、蛇のように、再び舌が畝うねつて舐なめ廻すと、ぐしゃぐしゃと顔一面、山女あけびを潰つぶして真赤まっかになった。

お町の肩を、両手でしつかとしめていて、一つ所に固かたまった、我が足がよろめいて、自分がドシンと倒れたかと思う。名古屋の客は、前のめりに、近く、第一の銅鍋の沸上った中へ面おもてを捺おして突つ伏ぶした。

「あッ。」

片手で袖を握つかんだ時、布子の裾のこわばった尖端とつさきがぐるりと刎はねて、媪ばばあの尻しつぽが片隅かすみへ暗くかくれた。竈かまどの火は、炎を潜めて、一時いつときに皆消えた。

同時に、雨がまた迫るように、窓の黒さが風に動いて、装もり上ったように見透かさるる市街に、暮早き電燈の影があかく立って、銅あかがねの鍋は一つ一つ、稲妻に似てぴかぴかと光つた。

足許も定まらない。土間の皺しわが裂けるかと思う時、ひいても離れなかった名古屋の客の顔が、湯気を飛ばして、辛うじて上るとともに、ぴちぴちと魚うおのごとく、手足を刎はねて、どつと倒れた。両腋を抱いて、抱起した、その色は、火の皮の膨れた上に、爛ただれが紫の皺を、波打って、動いたのである。

市いちのあたりの人声、この時賑にぎやかに、古椎ふるしいの梢こすえの、ざわざわと鳴る風の腥なまぐさ草くささ。

——病院は、ことさらに、お藻代の時とちがった、他ほかのを選んだ。
いのち
生命せいめいに仔細しさいはない。

男だ。容色なんぞは何でもあるまい。

ただお町の繰り言に聞いても、お藻代の遺書かきとびにさえ、黒髪のおくれ毛ばかりも、怨恨うらみは水茎のあとに留めなかつたというのに。——

現代——ある意味において——めぐる因果のおぐるま小車などという事は、天井裏のくるまご車麩を鼠が伝うぐらいなものであろう。

待て、それとても不気味でない事はない。

魔は——鬼神は——あると見える。

附言。

今年、四月八日、かんぶつえ灌仏会に、お向うの遠藤さんと、家内と一所に、こうじまち麴町六丁目、ぎぼうし擬宝珠屋根に桃の影さす、真宝寺のはなみどう花御堂に詣でた。寺内にえんまどう閻魔堂がある。遠藤さんが扉を覗いて、袖で拝んで、

「お釈迦様と、お閻魔さんとは、どういう関係があるんでしょう。」

唯今、七彩五色の花御堂に香水を奉仕した、この三十歳の、童女の、深甚微妙なる聴聞には弱った。ようほん要品をどくじゆ読誦する程度の智識では、おぼつか説教も済度も覚束ない。

「いずれ、それは……その、によげがもん如是我聞という処ですがね。と時に、見附を出て、みさご美佐古(鮎屋)はいかがです。」

「こや。」

「これは御挨拶。」

いきな坊主の還俗したのでもないものが、こはだの鮎を売るんだから、ツンとして、愛想のないのに無理はない。

「朝飯あさを済ましたばかりなのよ。」

午後三時半である。ききたまえ。

「そこを見込んで誘いましたよ。」

「私もそうだろうと思つてさ。」

大通りを少しあるくと、向うから、羽織の袖で風呂敷づつみを抱いた、脊のすらりとした櫛くし巻まきの女が、もの静しずかかに來かかつて、うつむいて、通過ぎた。

「いい女ね。見ましたか。」

「まつたく。」

「しつとりとした、いい容子ようすね、目許めもとに恐ろしく情のある、口許の優しい、少し寂しい。」

三人とも振返ると、町並樹の影に、その頸許えりもとが白く、肩が窶やつれていた。

かねて、外套氏から聞いた、お藻代の倂おもかげに直面した気がしたのである。

路地うちに、子供たちの太鼓の音が賑にぎわしい。入つて見ると、裏道の角に、稻荷いなりがみ神の

祠ほくらがあつて、幟のぼりが立っている。あたかも旧の初午はつうまの前日で、まだ人出がない。地口行じぐちあんど燈んがあちこちに昼の影を浮かせて、飴屋あめや、おでん屋の出たのが、再び、気のせいか、談話中の市場を髣髴ほうふつした。

縦通りを真直まっすぐに、中六なかくを突切つつきつて、左へ——女子学院の塀に添つて、あれから、帰宅の途みちを、再び中六へ向つて、順に引返ひっかえすと、また向うから、容子といい、顔立もおなじような——これは島田しまだ鬻だの娘さんであつた——十八九のが行違つた。

「そつくりね。」

「気味が悪いようですね。」

と家内も云つた。少し遠慮して、間を置いて、三人で斉ひとしく振返ると、一脈の紅塵こうじん、軽く花片はなびらを乗せながら、うしろ姿を送つて行く。……その娘も、町の三辻の処で見返つた。春闈たけなわに、番町の桜は、静しずかである。

家へ帰つて、摩耶夫人まやぶにんの影像——これだと速すみやかに説教が出来る、先刻さつきの、花御堂の、あかちゃんあかちゃんの御母おんぼぎみ——頂餅いただきと華をささげたのに、香をたいて、それから記しはじめた。

昭和六（一九三一）年七月

青空文庫情報

底本：「泉鏡花集成8」ちくま文庫、筑摩書房

1996（平成8）年5月23日第1刷発行

底本の親本：「鏡花全集」岩波書店

1942（昭和17）年7月刊行開始

入力：門田裕志

校正：林 幸雄

2001年9月17日公開

2005年9月27日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

古貉 泉鏡花

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>